

Ⅱ 令和元年度 S G H 研究開発の成果と課題

研究開発の成果と課題

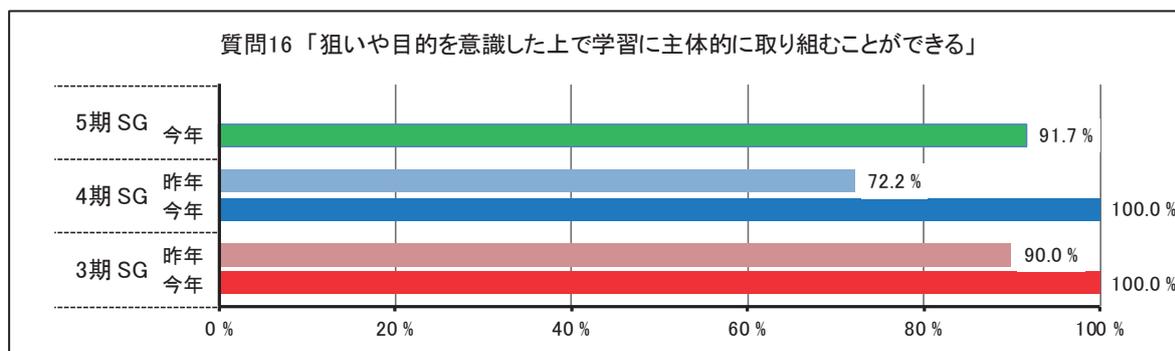
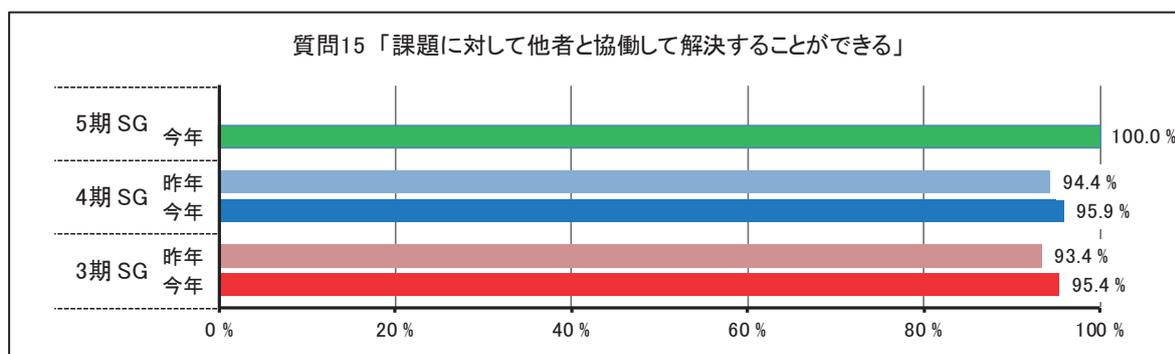
SGH 指定最終年度となる今年度は、SGH 関連諸行事の全般的な発展的改善を行った。特にアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生 10 名を受け入れたことにより、各行事において積極的な異文化交流を図る機会を設けるとともに、全校生徒が日常的に国際感覚を養えるよう配慮し、生徒のグローバルマインドの醸成を促進した。ここでは、構想調書（別紙様式 6）に掲げた研究開発の概要の項目及び関連する項目ごとに成果と課題を示すことにする。

以下に示すデータは、p. 113 関係資料 2「SGH 事業効果検証 生徒意識調査」の質問項目に対する属性ごとの生徒の回答から、肯定的回答（①非常にそう思う ②そう思う）の割合に基づくものである。また、一部の成果や課題については別のデータに基づいている。

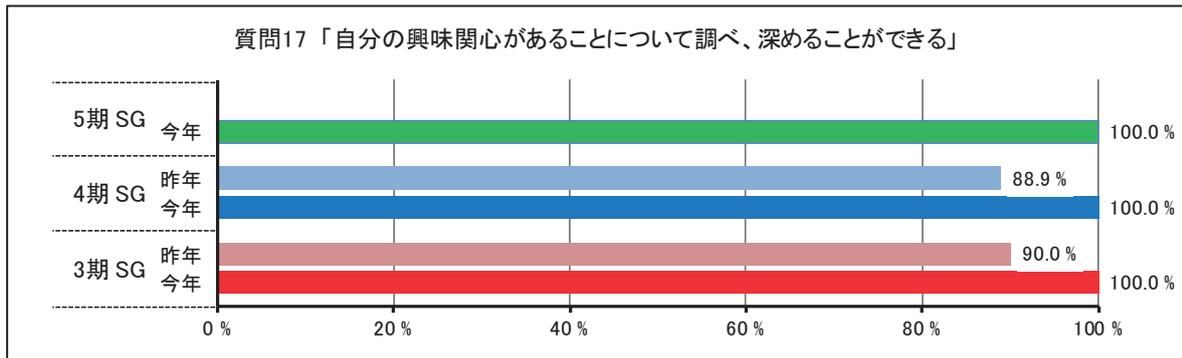
A. 課題解決力の育成・PBL 開発実践についての成果と課題

【成果】

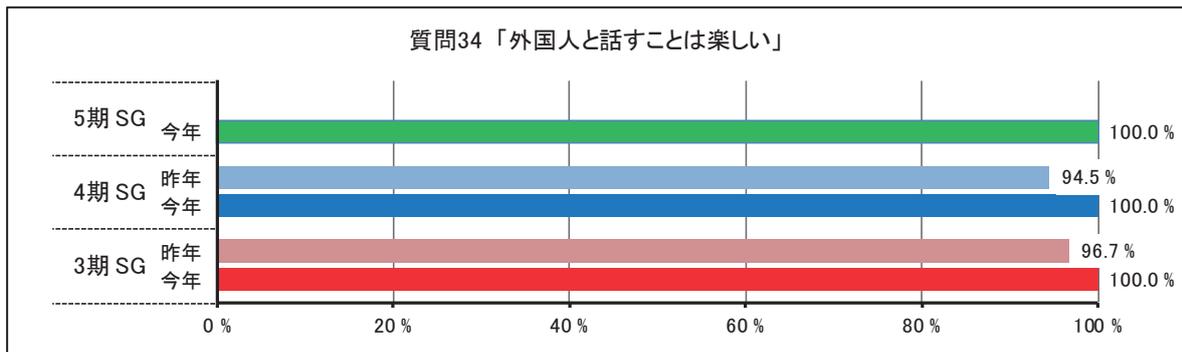
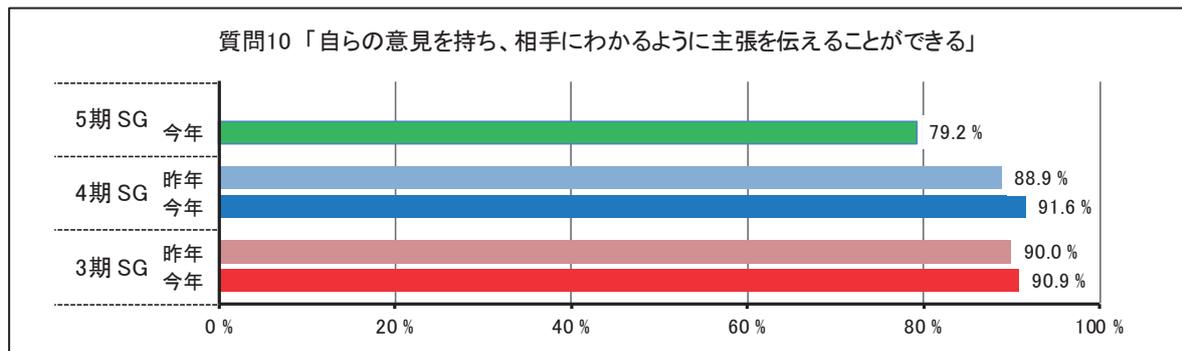
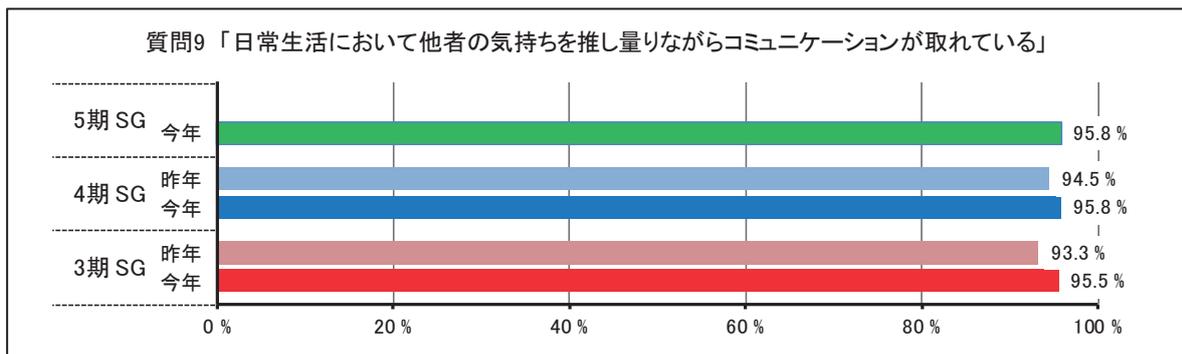
A-1 課題解決力に関する質問 15～17 について各期の SG クラスで比較すると、どれも概ね高い数値で推移している。また、一部を除きほとんどの質問において昨年度の数値と比べほぼ横ばいか上回っており、「探究科」の実施による課題解決力の育成が順調になされてきたことが伺える。



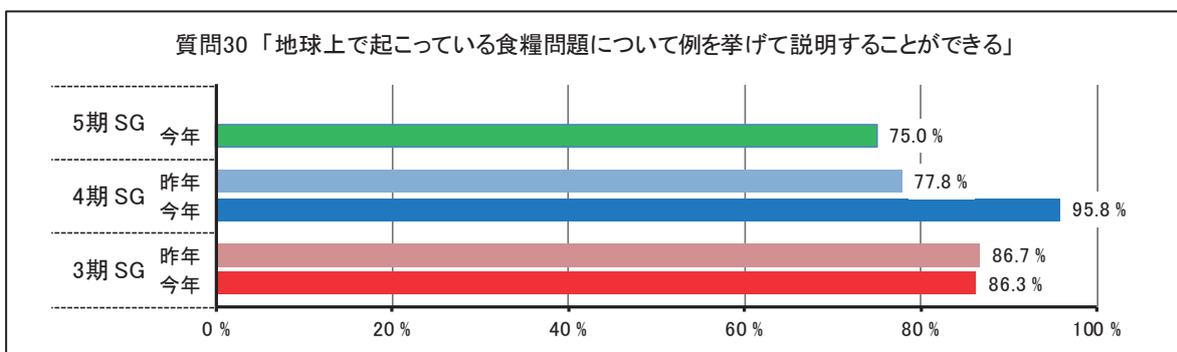
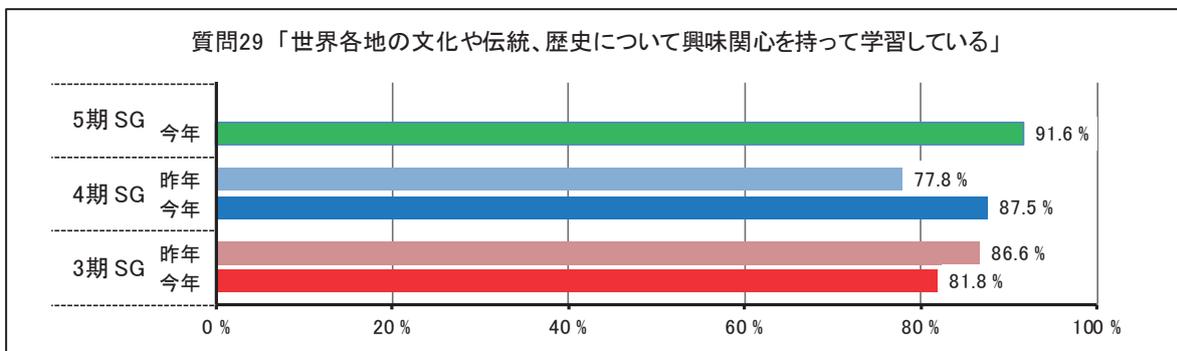
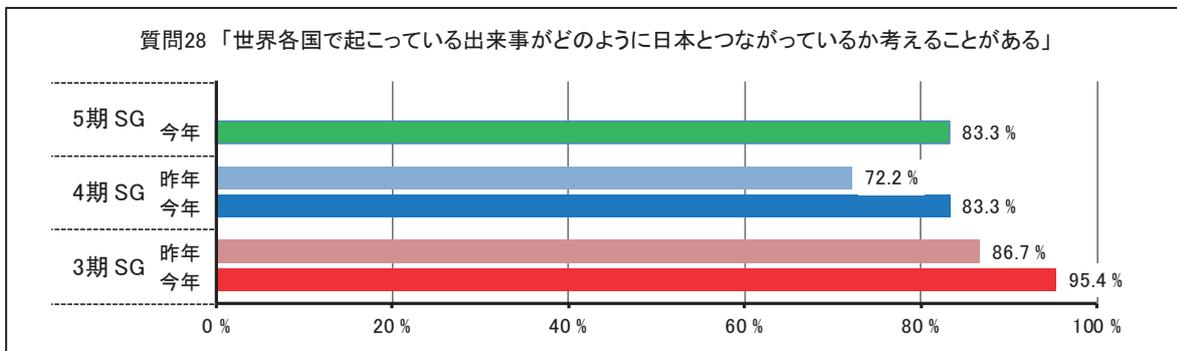
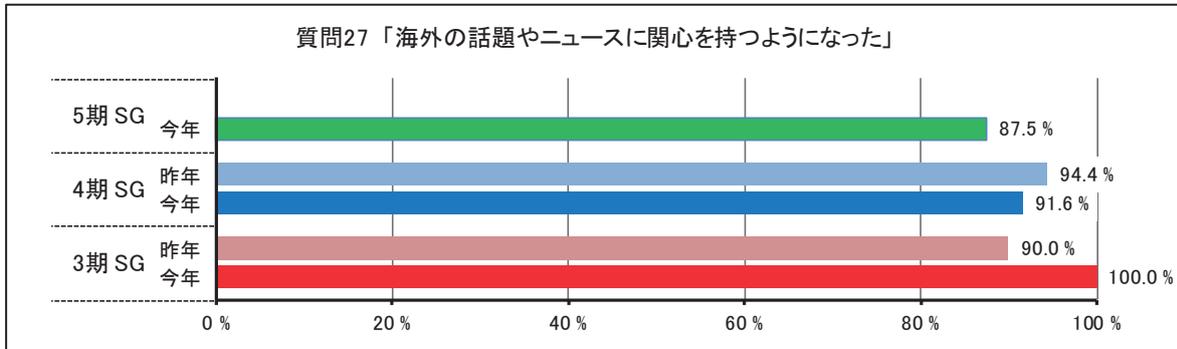
II 令和元年度 SGH 研究開発の成果と課題



A-2 コミュニケーションに関する意欲や能力、英語の活用に関する質問9・10・34については、それらの多くが高い値で推移しているため、順調にコミュニケーション力や英語学習に対するモチベーションは維持できているようである。質問10において5期生の数値が、4期生の昨年度の数値に比べやや低くなっているのは、SGH 報告会での発表準備にあたっての留学生との活動において十分な意志の伝達が行われなかったという反省に起因するものと考えられる。



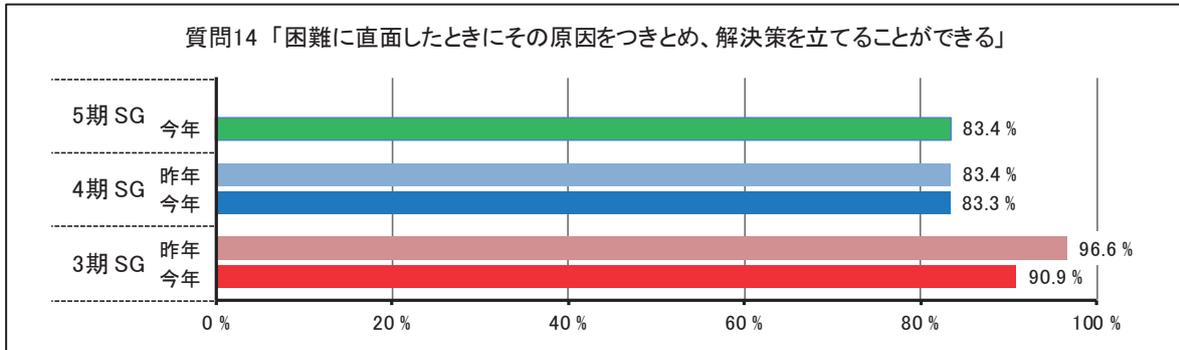
A-3 グローバルマインドの醸成に関わる質問 27～30 については、昨年度に比べ数値が大きく上昇または横ばいであり、若干の減少も見られるものの5ポイント以内の減少に留まっている。このことにより、探究活動の成果によって、概ね順調に生徒の興味・関心が国内外に広がるとともに、食問題に関する理解が進んでいることが分かる。



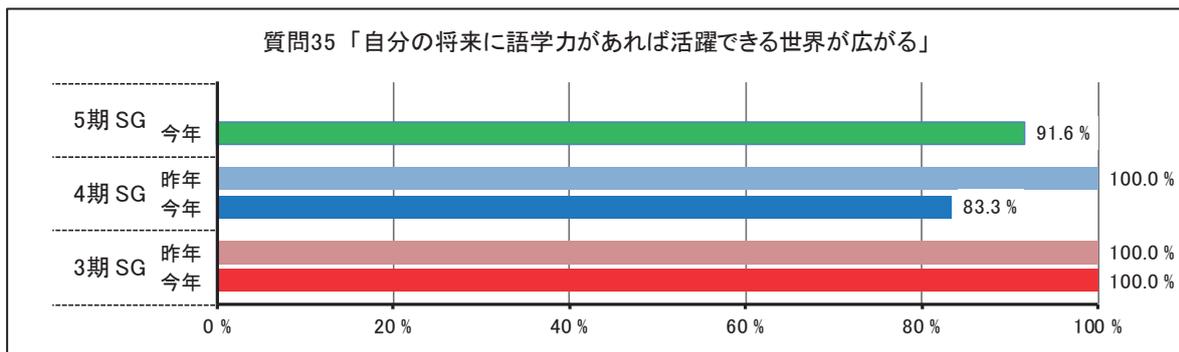
II 令和元年度 SGH 研究開発の成果と課題

【課題】

A-4 課題解決力に関する質問 14 では、3 期生の数値が唯一やや下がっており、解決策を立てることにおける成果を厳しく自己評価していることが現れている。p. 90 の論文制作のルーブリック評価の数値からも分かるように、解決法を明確に論述することはできているため、生徒自身が解決策を立てることに関しての苦手意識が強いということが考えられる。



A-5 英語の活用に関する質問 35 については、4 期生のみが昨年の数値をやや大きく下回っている。この理由については不明であるが、今後は英語授業等で自信や自己肯定感を持たせるよう工夫して指導にあたることが重要であると考えられる。



B. ルーブリック開発と運用についての成果と課題

【成果】

B-1 今年度は、昨年度に初めて作成したグローバル・キャンパスでの生徒用ルーブリックについて、評価項目と評価段階を精選したものを新たに作成して試用した。また、指導者が生徒を評価するためのルーブリックも作成し試用した。これにより生徒の評価にかかる労力や時間が軽減されるとともに、指導者の側も生徒の不足している部分を早期に把握し指導に生かすことができるようになった。

B-2 教師の指導力向上を目的とした本校独自の自己評価である指導指標を用いた測定によると、p. 57 に示す結果に見られるように、今年度は約 9 割以上の教員が何らかの方法で AL 型授業を実施している。昨年度から重点的に全教員に呼びかけ取り組んでいる「深い学びを促すための指導方法の開発」については、ほぼ昨年度並みの成果が上がっており、今後もさらにこれを推進していく。

【課題】

- B-3 様々な学習の場面でループリックの作成を行ってきたが、現在のところ全職員が作成できるところまでには至っていない。職員研修や学習会等を通じて作成法を学ぶ機会を設けていく必要がある。また、作成したループリックを常時閲覧できるデータとして蓄積し、自由に活用できるライブラリー作りにも着手したい。さらに今後は、評価の入力や集計の手間を省くために、評価データの収集においては紙ベースからデジタルベースへの変換を進めていく。

C. 高大接続と新たな入試制度への対応

【成果】

- C-1 平成 29 年度より開始した併設大学の新入試制度を今年度も実施し、新入試のシステムがほぼ完成した。
- C-2 併設大学の講義科目を先取りで履修する科目履修生制度を後学期（令和元年 9 月）より初めて導入した。大学での高度な学びの機会を早期に与えることで、生徒の学問への興味・関心を深めるとともに、高大接続の本来の目的に沿う体制に大きく近づいた。

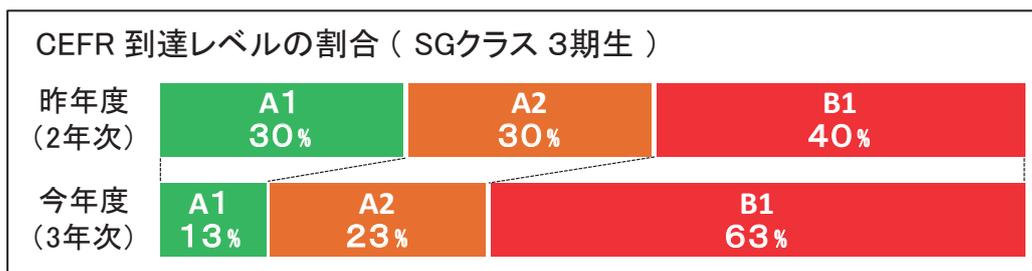
【課題】

- C-3 併設大学の新入試制度については、探究活動等の成果を併設大学側の直接的な入試選考の項目に加えることについて、今後も大学側と実施へ向けた話し合いを継続していく。
- C-4 併設大学の科目履修制度については、生徒に提示する受講科目の選定や募集方法の改善、受講できる日程の調整を行っていく必要がある。

D. 英語運用能力の向上についての成果と課題

【成果】

- D-1 今年度の 3 年 SG クラスの卒業段階での CEFR の B1 レベル達成率は 63%となった。目標値の 100%には到達しなかったものの、昨年度（2 年次）の段階で A2 レベル以上が 70%であったのが今年度は 86%まで伸びてきている。これは探究科をはじめとする学習活動の成果と英検及び GTEC の対策講座を充実させたことによる成果と考えられる。また、学校全体でも、CEFR の B1 レベル到達者が、昨年度の 94 名から今年度は 143 名と増加しており、本事業での取り組みが学校全体に波及し良い効果をもたらしている。



II 令和元年度 SGH 研究開発の成果と課題

【課題】

D-2 今年度において達成できなかった卒業段階での CEFR の B1 レベル達成率を、検定対策講座を強化する等工夫することで、次年度はできるだけ目標値の 100% に近づける。また、GTEC 等の検定の得点分析を進めたところ、Speaking や Writing に比べ、Listening や Reading が弱点であることがわかった。今後は、会話力や話を聞き取る力、語彙力、グラフ・図表を読み取る力、短時間で要旨を捉える力等を強化していく必要がある。

その他の成果と課題

【成果】

○ これまでで最大の「食のサミット」を開催

これまでで最多の予選 7 カ国 32 チームのエントリーがあり、予選を突破した 7 カ国 9 チームを迎えて最大となる本選「食のサミット」を開催した。今回のテーマは「食と飢餓」であり、本選前日のプレ会議において各チームの課題解決策について熱い議論を交わし、国連 WFP 協会へ提出する提言書を作成することができた。今後は、参加者たちによる提言書に基づいたアクションプランの実行が期待される。

○ 多くの留学生との協働体験の充実

昨年度に引き続き、アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を迎えた。今年度は国内の学校としては最多の 10 名を迎え、高校 1・2 年生の各クラスに配属した。全校集会や文化祭等の学校行事の他、探究活動へ本校生徒に混じって参加し、自国の文化について発表する等、異文化交流はもちろんのこと、様々な協働体験を通じて生徒や教職員、学校との間にかげがえのない強い絆が結ばれた。先の A-2 で挙げた質問 9 の結果が示すように、留学生との協働体験は、本校生徒にとって多様性の受容力とそれに伴うコミュニケーション力が高められるとともに、広い視野を持ち地球規模の課題に対する興味・関心を持つための良い機会となった。留学生にとっては、日本の伝統文化や慣習について、様々な実体験を通して学ぶことができた。

○ 日本の食

SGH 事業の中間評価で指摘のあった「日本の食」に注目した体系的な取り組みへの改善については、今年度も 1 年のグローバル・キャンパス（9 月）での課題への取り組みをはじめとして、中学生を含めた全校生徒で取り組む SGH 報告会（2 月）でのポスターセッション等、年間を通して「日本を意識した食」を第一に考えさせ、世界へと視野を広げられるよう配慮しプログラムしている。特に今年度は、次回の食のサミットのテーマとなる「食の安全性」についてを SGH 報告会で取りあげ、身の回りの食問題を意識させて取り組ませた。

○ 「深い学び」を促し「生徒が学びの主体となる」ことを意識した学校・授業づくり

アクティブ・ラーニング型の授業実践に全職員で取り組み、昨年度より「深い学び」を促す授業への工夫を推奨している。結果としては p. 57 の指標項目 No.5~8 に示した通り、昨年度に比べほぼ横ばいの平均約 50% の実施率であった。今年度は、これに加えて夏の職員研修でのワーク

ショップを契機として、「生徒が学びの主体となる」ことを意識した学校及び授業づくりを促進する取り組みに注力した。その結果、チームとしての話し合い等の時間は取れなかったようであるが、8割以上の教員が意識をした取り組みを続けており、今後もその継続と効果を期待するところである。

○ 教育開発部の設立

SGH 委員会や国際化委員会等の委員会レベルの体制を改め、新しく「教育開発部」を設立した。これまで実施してきた SGH 事業、及びこれからのグローバル教育の実践を主導していくことに加え、今後の本校にとって必要となる新しい教育の理念や手法を提案していく部署である。

○ 多くの学校や企業との提携

これまでの SGH 事業で培ってきたノウハウを多くの学校と共有し、相互の発展を図る目的で、研究開発で本校に協力していただいていた国内外の高校 4 校と MOU を交わし正式に提携した。また、今後の探究活動や課題研究に関する研究成果を向上させることを目的として、国内外の大学や企業とも新たに提携を結んだ。今後は、より多くの指導・助言をいただく機会を得ることで、生徒の学習活動を活性化させていく。

【課題】

● 「食のサミット」の新しい方向性

提携校を増やしたことにより、これまでコンテスト形式で実施してきた食のサミットを本校と提携校とが共同で提言書を作りあげていくように、次回から形式を変更する。ただし、これまで行ってきたサミット前日のプレ会議をディスカッション大会（仮称）と改め、テーマに基づいた問題点とその解決策を議論し合う機会を設け、そこに参加する中学生・高校生のチームを広く募集する。本校と提携校が主導して、このディスカッション大会での議論の結果をまとめ、サミットでの提言書に盛り込む形で実施する予定である。詳細については今後決定していく。

● 留学生との協働プログラムの定着・完成

留学生を受け入れ、本校生と通常の授業や探究活動において協働するプログラムは、留学生の在学期間が年度によって異なるため、ある程度流動的に変更がきくものにしなければならない。多くの留学生を受け入れたこの 2 年間の実績から、留学生と本校生の双方が最大限の学習効果をあげられるプログラムを定型化して完成させ、数年をかけて定着を図っていく必要がある。

● SG クラスから「GI クラス」へ

グローバル人材育成を行ってきたこれまでの SG クラスの後継として、次年度から新たに GI クラス（GI は「グローバル・イノベーター」の意）を 1 年次より開設する。この GI クラスは、イノベティブなグローバル人材を育成するクラスであり、新たにイノベーションスキルを養成していく。これまでの課題探究型 PBL の手法を継続・発展させながら、アントレプレナーシップのセミナーの実施や身につけた力を実践・試行するための海外フィールドワークを企画する等、高度な学びを提供する教育環境を新たに創造していく。今後、計画をより具体化して実践を積み重ね、社会に貢献できるより多くのグローバル・イノベーターを輩出していきたい。

II 令和元年度 SGH 研究開発の成果と課題

● 文理融合型のカリキュラムの編成

SG クラスは本校での特進コースに属しているため、課外授業が義務づけられ、教科によっては選択科目が細かく分かれています。したがって、カリキュラム編成やその変更には自由度がなく、「探究科」のみが文理融合型の学習内容を通常扱う唯一の教科であった。次年度より開設するGI クラスは、一般進学クラスに属するため、1年次はほぼ他コースと共通のカリキュラムであるものの、2年次からは文理総合コースとなるため、文系教科も理系教科も共に学ぶことができるようになる。完全な文理融合型のカリキュラムではないものの、今後少しずつ改良を重ね、グローバル・イノベーターを育成するために最適なカリキュラムを作成していく予定である。

● SG クラス卒業生を追跡するシステム作り

SGH 事業の効果検証のため、卒業生に昨年度末から SG クラス卒業生のキャリア形成を追跡するデータフォーマットを作成し、旧担任に inputs を依頼している。今後は、これらを同窓会組織と連携し、できる限りリアルタイムで卒業生の動向を把握するシステムを構築することを計画している。

● 提携した高校との協働

今年度の4校を加え、提携する国内外の高校は7校となった。今後は、この関係をどのように生かし、相互の発展につなげていくかが課題となる。現在のところ、本校での食のサミットや成果発表会、提携する学校のセミナーや研究発表会に生徒と教員が相互に参加・発表する機会を設けることや、課題研究等の授業でオンラインでの意見交換を予定している。また、教員どうしの情報交換も密に行っていくことで、互いの指導力を高めるべく切磋琢磨する関係を作りあげていきたい。